

VI. 総括



まとめに代えて

酪農経営は生き物のように有機的で複雑な体系
定型的な対応から、多様性に富んだ対応が求められる時代に

福島大学 食農学類準備室長 教授 生源寺 眞一氏

◇何よりも感謝

「酪農乳業の国際比較研究会」は今回で5回目の開催となり、過去4回はIFCNの調査研究情報が提供され、日本の酪農乳業関係者の方に議論していただくスタイルで実施してまいりました。

今回は、カナダからスティーブさん、オランダからキースさんにご参加いただき、誠にありがとうございました。さらに「乳の社会文化ネットワーク」から日本型酪農経営研究会の報告討議もありました。鶴川さん、岡田さんはそのメンバーです。一方、国際的な視野を広げる観点から、SDGsと酪農乳業のつながりについて「牛乳食育研究会」のメンバーである木村さんからご報告いただきました。

◇今回の研究会の特色

竹下さんによるIFCNからの情報は基本的に数量データが中心になりますが、オランダ、カナダ、日本に絞り込んだ上で、3カ国の酪農の実態を描き出しました。特にディスカッションの場では、初めて聞くことが随分多かったというぐらい、リアルな話を拝聴できたのではないかと思います。

全体を貫くキーワードは「持続可能性」です。その解釈には幅があり、かつ、中身も非常に多様です。特に印象的だったのは、木村さんの報告の冒頭で、30年ほど前の1987年のことですが、「環境と開発に関する世界委員会」、これは委員長をされたノルウェーの女性首相の名前を取って「ブルントラント委員会」という言い方をすることが多いのですが、このときに持続可能な開発というか、持続可能な発展の定義が行われており、定義そのものをパワポの情報として提供していただきました。「将来の世代と現在の世代の、ある意味では下手をするとコンフリクトが起こるようなところを回避する形」というのが、元々の持続可能な開発の概念であって、この点の重要性について思い起こしました。

◇意味のある比較が可能な酪農乳業

3カ国について、オランダはヨーロッパの歴史を背負う古い国、お年寄りの国と言えます。一方で新大陸、若い国としてのカナダ。そしてアジアで最初に先進国となった日本。歴史的な背景を全く異にする国の比較になっています。また、同じ北半球で、緯度も北海道を含めればそれほど大きく変わりませんが、国の性格は全くと言っていいほど違ってきます。

これほど性格が違う国でも比較ができるのは、酪農乳業の世界にとっては当然のことかと思われませんが、おコメの世界であればアジアが9割方を占め、国際的な比較といっても基本的にはアジアに若干アフリカが入ってくる程度であるのに対して、酪農乳業に関しては、ほとんど世界全体になります。竹下さんの報告にもありましたが、IFCNのリサーチパートナーが100を超える世界であるということを改めて認識しておく必要があります。

将来の展望という意味では、今申し上げた広がりという点に関係して、日本の経験がアジアの国々の今後についての参考になる面があると思います。その意味でも、中国を含むDairy Asiaの13カ国をはじめとして、アジアの酪農乳業を巡る情報も今後は非常に大事になってくると感じました。

◇共通項と相違点

日本については、過去半世紀の急成長によって頭数規模が拡大したため、酪農先進国との意味のある比較ができたと思います。私自身が30年ほど前に北海道、イングランド、ウェールズの数量分析的な比較をした時のデータは、北海道については大規模層のみに限定し、イギリスでは平均規模層をとっていましたが、今ではほぼ重なる規模層での比較ができることに、改めて感銘深く感じております。

共通項や相違点はいろいろありました。人材確保は非常に難しいということが3カ国に共通しています。TMRセンター、コントラクター、あるいはカスタムワークという表現をカナダは行っていたと思いますが、いわば機械設備を共同で利用し、あるいは作業を引き受けるという形で効率的に活用する点も共通していました。また、家族経営の重要性についても共通点としてあったのではないかと思います。

比較によって学ぶべき点は多いと思いますが、酪農経営はあたかも生き物のように有機的で複雑な体系であると言えます。すなわち、ある部分だけを借りてきて置き換えて、改善されるとは言えない面があるはずです。ある部分を変えれば、他のところも調整しなければいけないというのが、有機的な体系の意味合いであり、単純に模倣することには少し警戒した方がよいと思います。

◇社会的・制度的環境の違いも浮き彫りに

クォータ制度の下で供給管理が定着しているカナダ、30年続いたクォータ制度が廃止されたオランダ（本日のお話から、リン酸投入可能な量によっては実質的に生産の制約が効いており、クォータ制度廃止については疑問符が付けられていた面もあるかと思いますが）、そして日本も1979年に最初の生産調整を行い、その後も何回か実施されましたけれども、今は生産基盤の弱体化が進み、減産型調整は過去のものとなっているという意味では、社会的・制度的な環境は随分違います。

乳価に関して、竹下さんの報告の中で、ジグザグ、ローラーコースターという表現がありましたが、日本とカナダはこの意味では国際市場からは遮断されていますが、オランダはかなり影響を受けていることははっきりしています。しかし、飼料に関して、日本の特に都府県は、購入飼料に依存する部分が多いため、2007～2008年の価格高騰時には大変なインパクトがありました。その後も含めて、特に穀物価格の影響を受けやすいという面が、日本の場合にはかなりあるということも申し上げておきます。

◇分析視角に学ぶべき点も

SDGsについては、日本ではまだまだ浸透していないのではないかという話がありました。これは分野によって違いがあるかもしれませんが、少なくとも徐々に浸透してきていると思います。

本日の研究会でも、環境・経済・社会、それから牛乳・乳製品、あるいは酪農乳業の場合には、栄養も加えてはどうかという話がありましたけれども、この三つの次元（dimension）は、「トリプルボトムライン」という言い方をしていたと記憶しており、これも含めて認識を共有できたと思います。そして、SDGs17の目標やその169のターゲットの一部とSWOT分析を組み合わせることも、分析視角として有効と感じました。

3カ国は、それぞれに固有の酪農経営を生み出してきています。さらに日本については、北海道と都府県では随分違いますし、中山間地域と都市近郊での違いなど、それぞれに個性的な酪農経営を生んでいます。そういう意味では、定型的な解答よりも、その地域、その酪農経営者の履歴など、いろいろな条件に対して、的確で応用力のある解法が大事だという時代になってきていると思います。

日本の農業経営全体を見ても、酪農経営は稲作などに比べると、はるかに先駆的な役割を果たしてきています。その結果、定型的なモデルがあって、これに皆さん倣えという、昔の農業普及のスタンスではとても追いつかないような状況になっていると感じました。

改めまして、報告・討論された各位、司会を務められた小林さんに感謝申し上げます。また、長時間にわたりご清聴いただいた参加者の皆様に感謝申し上げます。大変得るところの多い一日だったと思います。

以上をもちまして、総括、閉会の辞に代えさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。